

授 業 科 目 の 概 要			
(保健医療学研究科保健医療学専攻)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備 考
共 通 教 育 科 目	保健医療学概論	<p>(28 宮下和久)</p> <p>近年、医学医療はめざましい技術革新を遂げ、疾病の病因究明および治療に大きく貢献してきた。高度化、専門化された医療が進行する一方で、疾病中心の医療から患者および家族への医療支援、社会的支援へとその支援が人々の日常生活の場を基本として、展開されることが求められるようになってきた。また、少子・高齢社会が急速に進む中で、乳幼児期からの各ライフステージを見据えた、また、疾病の自然史(健康増進から疾病の予防、治療、リハビリテーション)からみた、保健医療のあり方が問われている。</p> <p>本講義では、保健医療の現状と課題について概説し、今後のあり方について理解を深めることを目的とする。</p>	
	医療倫理学概論	<p>(29 武田眞太郎)</p> <p>病苦からの解放をめざす医療は、倫理に対する最強の実践的手段であった。しかし、毒ガスや生物兵器、生体実験などは医療技術とは言えない。生体実験を告発した「ニュルンベルク綱領」に端を発した生命倫理の課題は、一般の医療現場における患者の権利や遺伝子診断・治療などへと広がった。</p> <p>倫理上の判断基準は主として善悪に代表される道徳的価値であるが、今日では、一方で善である医療技術が、他方では悪になるという矛盾をも生み出している。しかも、価値づけをする主観を客観的な記述で統一することは困難である。これには、学際的な対応が必要で、次の4領域での対応が求められる。 理論的な生命倫理の領域。 日々の医療行為における道徳的な判断にかかわる領域。 法律や政策、倫理指針などを考える領域。 理論と個別のケースにおける判断をつなぐ役割をもつ。 歴史的、文化的な流れからの理解が必要な領域。</p> <p>そこで本概論では、とくに と の領域について、医療関係者の専門的判断と患者の判断をどう調整するか、治療の有効性と患者の自己決定が相反したときには、などの視</p>	

## 授 業 科 目 の 概 要

(保健医療学研究科保健医療学専攻)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備 考
共 通 教 育 科 目		点から実際的な問題に検討を加える。	
	疫学・保健統計学概論	<p>(概要)</p> <p>現代医学は、高度先進医療として確固とした科学的基盤を持ち、疾病の原因追究やリスクの集団的管理は疫学的手法により、また、医療効果の判定はEBM(Evidence-based medicine)に基づいてなされている。保健医療分野の中心には、現代医学があり、その周辺には、我が国では、伝統的に国民に支持されてきた鍼灸など東洋医学を始めとした補完代替医療がある。しかし、これらは未だ科学的評価を受けていない。本講では、疫学・保健統計の基礎を学び、保健医療従事者として必要な疫学的思考や、臨床効果の判定や実験計画の作成などの統計的手法が身に付くよう指導する。</p> <p>(オムニバス方式 / 全 15 回)</p> <p>( 1 吉田宗平 / 5 回)</p> <p>疫学とは、集団における疾患の分布と頻度に注目する基礎医学で、人間集団における疾患パターンを調べ、ある疾患にかかりやすい人と、かかりにくい人が何故いるかを極めようとする学問である。ここでは、保健医療にかかわるものとして、1) 疾患の頻度を測定すること、2) 疾患の出現パターンを記述すること、3) 疾患の集団発生を調査すること、4) 診断用の検査の正確さを査定すること、5) 治療の有効性を評価すること、6) 疾患が進行する原因を同定すること、7) 疾患の予後を予知すること、を理解できるよう概要を講義する。そして、基礎的な疫学尺度を算出し解釈を加えること、多彩な研究デザインの利点と欠点を理解すること、バラツキとバイアスを理解すること、すでに出版された論文を批判的に読むこと、が出来るよう指導する。</p>	オムニバス方式

授 業 科 目 の 概 要			
(保健医療学研究科保健医療学専攻)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備 考
共 通 教 育 科 目		<p>(21 坂口俊二 / 5回)</p> <p>Evidence-based medicine (EBM)の基本的事項を学び、保健医療人として日常臨床や臨床研究に活かせるよう指導する。EBM の実践に向けては、主に次の4つの手順とそれらの情報を結合することが大事である。すなわち、1)患者の問題の定式化、2)論文などからの外部情報(一次・二次情報の検索)、3)情報の批判的吟味、4)情報の患者への適用、を系統的に理解できるようその手順を講義する。そして、一次情報に対する「冷静な眼」を養うこと、求める情報を二次情報から適切に検索すること、が出来るように指導する。</p> <p>(8 山本博司 / 5回)</p> <p>実験計画法を中心に、次の手順で講義する。</p> <p>疫学の原理と方法とを踏まえて、興味をもった健康上の問題を研究するために実験計画をたてる際に必要な基本事項を概説する。以下の5つが主な内容となる。健康上の問題に対する仮説を立て、研究方法(横断研究、コホート研究、ケース・コントロール研究など)を明確にする。対象とする集団を決定する。健康事象(疾病など)とアウトカム(結果)の定義を決定する。健康事象を測定する尺度と方法を決定する。結果の解析方法を決定する(結果の解釈)。</p> <p>「 」で学んだことを実際の研究に当てはめて考える。具体的な例として、「変形性膝関節症に対するはり治療効果」に関する論文をいくつか取り上げて解説する。</p>	
	機能形態学概論	<p>(10 東家一雄)</p> <p>生体の構築と生命現象の営みに必要な最小機能単位である「細胞」について、機能形態学的に解説する。特に、ヒトを含む高等脊椎動物を構成する真核細胞に観察される多様な細胞小器官が示す形態と機能の関連に焦点を合わせ、現代の医学生物学的思考の基盤となる細胞生物学的</p>	

## 授 業 科 目 の 概 要

(保健医療学研究科保健医療学専攻)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備 考
共 通 教 育  科 目		知識の涵養を目的とする。さらに、細胞間相互作用で構築される組織構造の維持に必要な細胞接着分子についても触れ、細胞を基礎とする生体構築の合理性に関する理解を深める。	
	生体情報学概論	(11 櫻葉 均) 病院やクリニックを訪れる患者の多くは痛みを訴える。これらの患者にとって痛みは深刻で複雑な問題であり、このことはさまざまな医療分野において共通していることである。それぞれのコメディカル分野におけるリーダーとして、あるいはこの分野で研究を志す者として、痛覚の本質を正しく理解し、未知の領域の痛みを洞察する力を養うことは重要である。現在、生理的な痛みの理解は進んできたが、病的な痛みである慢性痛の研究は発展途上の段階である。この授業では、痛みの一般的性質や生理学的意義について学び、神経系における痛みの受容や伝達の仕組みについて講述する。	
	病態情報学概論	(12 中峯寛和) 生体は、神経系、内分泌系、および免疫系を介したネットワークにより制御されている。中でも免疫系は、細胞接着による直接的な、あるいは免疫グロブリン・サイトカインを介した間接的な情報伝達システムであり、複雑・多彩な伝達経路により外敵および内敵から生体を防御している。従って、保健医療学の研究を志す学生にとって、このような防御機構を生体・臓器組織・細胞・分子レベルで理解することは重要である。また、本来防御機構であるはずのこのシステムが時には破綻し、その結果感染症、各種アレルギー、自己免疫疾患、腫瘍などが発生する。これらには、例えば関節リウマチのように鍼灸治療や理学療法の有効性がますます期待される疾患もある。本概論では、以上のような観点から、免疫系における情報伝達を概説するが	

授 業 科 目 の 概 要			
(保健医療学研究科保健医療学専攻)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備 考
共 通 教 育 科 目		、特にその中枢であるリンパ球および抗原提示細胞の生理学的特徴と病的状態での変化に重点を置く。	
	内科系病態学概論	<p>(概要)</p> <p>我が国では高齢社会の中で、肥満、糖尿病、高血圧などを合併するメタボリックシンドロームや加齢に伴うアルツハイマー病、パーキンソン病など老年期疾患が急増し、一方では、分子生物学的手法による各種疾患の原因遺伝子の同定、メタボリックシンドロームにおける各種ホルモンの発見、脳の老化への酸化的ストレスやアミロイド沈着の関与など新しい知見が日々集積されている。本講では、そうした現代医学的知識を基盤に保健医療人として、患者に対する治療手技の適否を判断できる能力や研究者としての基礎能力を養成することを目的とする。</p> <p>(オムニバス方式 / 全 15 回)</p> <p>(15 津田和志 / 4 回)</p> <p>肥満は糖尿病、高血圧をはじめとする生活習慣病の危険因子のひとつであり、メタボリックシンドロームの基盤となるが、肥満の血圧上昇作用や心血管病変を引き起こすメカニズムについては不明な点が多い。最近、脂肪細胞で leptin や adiponectin などの adipocytokine が、生成、分泌されることが明らかとなり、摂食抑制作用や糖脂質代謝調節のみならず直接血圧循環調節にも関与することが明らかとなってきた。本講座では、メタボリックシンドロームに関連する各種ホルモンの作用機序や生理的意義について最新の知見を学習する。</p> <p>(16 畑村育次 / 4 回)</p> <p>高齢者社会において、生活習慣病であるメタボリックシンドロームは肥満、糖尿病、高血圧を合併し、さらには慢性腎不全を引き起こすため、克服すべき疾患である。この</p>	オムニバス方式

## 授 業 科 目 の 概 要

(保健医療学研究科保健医療学専攻)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備 考
共 通 教 育 科 目		<p>講義では慢性腎不全を誘発する要因、すなわち高血糖、高血圧、高脂血症がどのように腎臓機能および組織に影響を及ぼし、どのような機序で腎不全となるのかを、さらにその予防法を、最近の論文を引用し説明および討論をおこない、保健医療人として必要な現代医学の知識の習得を目的とする。</p> <p>( 1 吉田宗平 / 4 回 )</p> <p>加齢に伴うアルツハイマー病、パーキンソン病など老年期疾患が急増しており、保健医療に携わる者にとっても、その病態をよく理解して治療手技の適否を的確に判断し、患者の機能回復、健康維持、更には療養指導やリスク管理等にあたることが求められている。そのためには、日常よく遭遇する代表的な神経疾患につき「生活の中」における生きた神経学をまなべるよう症状、徴候、病態、予後についての講義に加え、ADL の低下の原因や対処法についても言及する。</p> <p>( 17 紀平為子 / 3 回 )</p> <p>高齢化により急増している老年期神経疾患として、特にアルツハイマー病、パーキンソン病、筋萎縮性側索硬化症、脳血管障害性認知症やパーキンソニズムにつき、臨床症状、神経病理、病態および最近の分子生物学的知見につき概説を行う。臨床の現場で医療者として最新の知見を常に獲得し研究できる基礎能力を身につけることを目的として、医療における基礎知識や療養生活上の諸問題、患者のQOL 向上のための社会的な仕組みなどについて、自主的な文献検索と発表による討論形式で講義を進める。</p>	
	外科系病態学概論	<p>( 概要 )</p> <p>外科学は他の臨床医学領域と同様に進歩のスピードが年々高まっており、遺伝子医療や再生医療などをはじめ数年前では『想像』の範疇であった方法論が次々に現実化し</p>	オムニバス方式

授 業 科 目 の 概 要			
(保健医療学研究科保健医療学専攻)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備 考
共 通 教 育 科 目		<p>ている。しかし『外科』といっても日常的に用いられてきた保存治療が改めて見直される動きがあり、またそのエビデンスが再検討されているのも事実である。</p> <p>一方で先端医療に限らず、倫理面の整備のみならず治療を受ける側と担当する側との人間関係が改めて強調される側面も有している。</p> <p>したがって、本講義では複数の教員が様々な立場から外科学領域の知識 / 技術等を解説するが、単なる『一方通行』の講義ではなく、臨床に携わる者としてベースに有することが好ましい種々のポイントを複数の観点から共有することを目的とする。</p> <p>(オムニバス方式 / 全 30 回)</p> <p>(27 青木洋三 / 15 回)</p> <p>外国と日本における外科学の歴史、 科学論文の構成の基本を学ぶことから始める。次いで代表的、一般的な外科疾患に関し、その疫学、病因、症状、診断法、治療法につき分担して勉強し、これを発表し合って全員が一定レベルの知識を身につける。外科系専門誌からその疾患に関する適切な英文論文を選択・配布し、全員で詳読する。</p> <p>この一連の流れを通じ、 検索能力、 理解したことを発表、議論し、他と正しい内容を共有する能力、 論文を読み書きすることの意義、自らの専門領域での能動性、創造性を持つことの重要性、 経験や実験から得られた事実を文章にする能力、得られたデータの統計学的処理の重要性等を習得しながら、外科的疾患と外科学に関する研究の一端に触れる。</p> <p>(7 増田研一 / 5 回)</p> <p>運動器の病的状態である整形外科的疾患や傷害に関して、過去 1 年間の論文や学会 / 研究会発表などから最新のトピックスを中心に解説することからスタートする。その中から方法論や統計 / 検定などエビデンスに基づいた</p>	

## 授 業 科 目 の 概 要

(保健医療学研究科保健医療学専攻)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備 考
共 通 教 育 科 目		<p>治療法等の考え方なども含め指導する形式で講義を進める。</p> <p>(18 金井成行 / 5回)</p> <p>最近では、医師のみならず、すべての医療従事者に画像診断が要求されている。</p> <p>本講義では、日常の臨床でよく遭遇する整形外科疾患を中心に、レントゲン、MRI、CTなどの画像解析の重要ポイントについて解説をする。</p> <p>(14 中塚映政 / 5回)</p> <p>医療の原点でもある「痛み」を知ることを目的に系統講義を行う。「痛み」とは、身体の異変を感知する生体にとって極めて重要な感覚である。これまで、「痛み」は数値で客観的に評価できないこと、医療者を含めた他人には理解できないこと、我慢することを美德する考えなどによって、主訴である「痛み」は軽視されてきた。その結果、慢性的な「痛み」に悩み、ドクターショッピングをして無効な治療を続けている患者が非常に多いことが判明している。近年、「痛み」の神経科学的研究の発展により、「痛み」の概念が大きく変わってきている。本講義では、これまでの「痛み」に関する研究や発見などに触れながら、「痛み」がどのような概念として捉えられてきたのかを概説する。</p>	
専 門 教 育 科 目	臨床鍼灸学特論講義	<p>(概要) 大テーマ：鍼灸治療と EBM</p> <p>鍼灸臨床において経験的にその有効性が認識されている疾患に対する鍼灸治療効果の科学的評価、すなわち Evidence-based Medicine (EBM) の考え方について講義を行う。また、臨床研究の具体的方法、それぞれの利点と欠点、適応と限界、鍼灸臨床試験において現在問題となっている事項などについて解説し、様々な疾患や患者において鍼灸の臨床効果を評価するのにどういった方法が最適か、</p>	オムニバス方式

授 業 科 目 の 概 要			
(保健医療学研究科保健医療学専攻)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備 考
専 門 教 育 科 目		<p>どういう点に注意せねばならないかを的確に判断し、実践出来る能力を身につけるように指導する。</p> <p>また、鍼灸の臨床研究は、現在では日本、中国、韓国よりもむしろ欧米を中心に補完代替医療( Complementary and Alternative Medicine: CAM )の一つとして発展しているが、そうした世界の流れも紹介しながら、今後の鍼灸臨床研究の進むべき方向について理解するよう指導する。</p> <p>(オムニバス方式 / 全 15 回)</p> <p>( 3 若山育郎 / 3 回 )</p> <p>小テーマ：鍼灸におけるプラセボ</p> <p>鍼灸臨床試験におけるプラセボとプラセボ効果について講義を行う。プラセボとは「喜ばせる」という意味で、薬理効果はないが、本物の治療と見た目には区別がつかないものを言う。鍼灸に限らず比較対照試験には必須のものであるが、鍼灸の臨床試験でプラセボ対照が作れるかどうかは議論のあるところである。本講義では、鍼灸臨床試験におけるプラセボの意義について講義を行い、ディスカッションの場を作りたいと考えている。</p> <p>( 5 榎田高士 / 4 回 )</p> <p>小テーマ：鍼灸の科学化 痛みと鍼灸治療</p> <p>鍼の鎮痛作用は、1971 年のニクソン米大統領訪中時の鍼麻酔の報道により広く知られるようになった。その後、世界各国で鍼鎮痛の研究が行われ、鎮痛のメカニズムが徐々に解明されるに至っている。麻酔科ペインクリニックでは多くの疼痛疾患に対し、積極的な治療法が行われているが、鍼灸治療もその手段のひとつとなっている。そこで、ペインクリニック領域での鍼灸の科学化とその臨床応用について講義を行う。</p> <p>( 6 吉備 登 / 4 回 )</p> <p>小テーマ：CAM における鍼灸</p> <p>補完代替医療 (以下 CAM) が西洋医学のさまざまな欠点</p>	

## 授 業 科 目 の 概 要

(保健医療学研究科保健医療学専攻)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備 考
専 門 教 育		<p>を補うものとして、重要視され始めているが、現在日本における医療制度のなかで、CAM を実施するにおいては様々な問題がある。さらに、新しい医療システムとしての「統合医療」を目指すためにも乗り越えるべき問題が多く存在する。CAM のなかでも特に鍼灸治療についてさらに考えていきたい。</p> <p>(21 坂口俊二 / 4 回)</p> <p>小テーマ：鍼灸における臨床試験</p> <p>「鍼灸における臨床試験」をテーマに講義を行う。EBM の概念が投入された 1990 年代より、鍼灸の適応症についても、ランダム化比較試験 (RCT) 至上主義となった。しかし、その後約 20 年が経過した現在では、その考えに大きな変化が出ている。本講義では、前半を RCT の利点と限界、後半を RCT の欠点を解決する研究デザインとして特に鍼灸臨床で実践されている N-of-1 トライアル (N-of-1 trial) また近年あらためて見直されている症例研究の位置づけについて概説する。</p>	
科 目	臨床鍼灸学特論演習	<p>(概要) 大テーマ：鍼灸治療と EBM</p> <p>本演習では、臨床鍼灸学特論講義の内容を踏まえて、各テーマをさらに発展させ、実践する能力を養う。</p> <p>(オムニバス方式 / 全 15 回)</p> <p>(3 若山育郎 / 3 回)</p> <p>小テーマ：鍼灸におけるプラセボ</p> <p>鍼灸臨床試験におけるプラセボについて文献検索を行い、その結果を解析して吟味する。その上で、鍼灸臨床試験における対照群としてプラセボの設定は可能なのか、また可能とすればどのようなものが良いのかを学生と共に議論、検討する。</p>	オムニバス方式

授 業 科 目 の 概 要			
(保健医療学研究科保健医療学専攻)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備 考
専 門 教 育 科 目		<p>( 5 榎田高士 / 4 回 )</p> <p>小テーマ：鍼灸の科学化 - 痛みと鍼灸治療 -</p> <p>演習では、鍼灸臨床学特論講義の内容を踏まえて、ペインクリニックにおける疼痛疾患に対する臨床研究の方法、それぞれの利点と欠点、適応と限界について学ぶ。その後、疼痛疾患に対しての鍼灸治療の文献検索を行い、鍼灸刺激法について文献に記載された条件を整理し、鍼灸臨床に役立つように指導する。</p> <p>( 6 吉備 登 / 4 回 )</p> <p>小テーマ：CAM における鍼灸</p> <p>日本における CAM ( 鍼灸 ) および統合医療について、治療および健康保持・健康増進・病気予防のための医療・福祉・保健・教育などの機関、施設、制度などにおける広い枠組みを包括できる多角的な統合医療システムを構築することが必要となる。</p> <p>そこで、日本における CAM ( 鍼灸 ) および統合医療について、各自がテーマを絞って情報を収集し、検討できるような能力を身につけるように指導する。</p> <p>( 21 坂口俊二 / 4 回 )</p> <p>小テーマ：鍼灸における臨床試験</p> <p>東洋系身体機能学特論講義のテーマ「鍼灸における臨床試験」を受け、本演習では鍼灸臨床で遭遇することの多い症状や症候に焦点をあて、臨床研究の現況について情報検索するとともに、それらを批判的に吟味し、その症状・症候に適した鍼灸の臨床試験デザインを構築できるよう指導する。</p>	
	臨床身体機能学特論講義	( 9 鈴木俊明 )	<p>身体運動の理解は、障害をもった患者様に対する有効な、理学療法を含めた物理療法や運動療法を確立する上で必要不可欠となる。また、現時点で障害を有していなくても、理想的な身体運動の理解に基づいた運動および動作指</p>

## 授 業 科 目 の 概 要

(保健医療学研究科保健医療学専攻)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備 考
専 門 教 育  科 目		導によって、その発生を予防することも可能である。本講義では、神経生理学および運動学的手法などの見地から、身体運動を科学的に解析することを目的とする。具体的には筋電図を用いた電気生理学的手法、筋機能評価運動装置および動作解析装置を用いた生体力学的手法を用いた論文より、身体運動を理解する。	
	臨床身体機能学特論演習	( 9 鈴木俊明 ) 身体運動を十分理解した上で、表面筋電図、誘発筋電図、筋機能評価運動装置および動作解析装置を用い、身体運動を客観的に計測する技術を習得する。また、収集したデータを諸種の方法で解析して、運動療法に活かせるように指導する。なお、その一部として、本学の取り組みである理学療法と鍼灸医学の考えを組み合わせた新しい治療法である「経穴刺激理学療法」の治療理論とその効果に関する神経生理学的研究を演習することで、手指による経穴への刺激が身体機能に与える影響を明らかにする。	
	機能形態学特論講義	( 10 東家一雄 ) 人体を構成する諸器官は合目的に形成され、各器官の臓器特性は神経・内分泌・免疫系を中心とする生体情報の統御によって恒常性が維持されている。本特論では、それら恒常性維持の異常が、特に、運動器系(骨・筋)疾患の際に、どの部位がどのように障害されるか解説し、ヒト。実験動物の組織標本を用い、それら器官の正常な構造と機能、異常になった状態を組織学的・分子形態学的に理解し、疾患の予防や治療について考察する。	
	機能形態学特論演習	( 10 東家一雄 ) 機能形態学特論講義で学習した内容を、実験医学的に、多面的に理解できるよう、本演習では小型実験動物(ラッ	

授 業 科 目 の 概 要			
(保健医療学研究科保健医療学専攻)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備 考
専 門 教 育 科 目		ト・マウス)を用い、正常及び筋不動モデル作成、それら運動器系臓器での神経・内分泌・免疫相関と筋紡錘・腱紡錘内免疫担当細胞の動態について光学顕微鏡・電子顕微鏡標本を作製し観察させ、分子形態学レベルの機能形態学的考察を行い、併せて、高齢者に多い廃用性筋萎縮とそれら恒常性維持の異常との相関などについて考察する。	
	生体情報学特論講義	(11 榎葉 均) ここでは、「痛み研究」の現状を紹介し、今後の展望や課題について講述する。近年、神経生物学の発展に伴い、次第に明らかにされつつある侵害受容システムやその情報処理機構について、細胞(ニューロン)レベルで、あるいは分子レベルで理解することを目的とし授業を展開する。同時に、部分的にはあるが徐々に解明されてきた慢性痛の仕組みについても講義する。 また、修士論文の作成に必要な実験技術である電気生理学的手法(パッチクランプ法)や形態学的手法(in situ ハイブリダイゼーション法、免疫組織化学法)等についても紹介する。	
	生体情報学特論演習	(11 榎葉 均) この演習では、これまで既に発表されている疼痛に関する論文を検索することから始める。学生には、最も興味を持った論文の一つを選択させ、その論文の概要(主旨、目的、方法、結果、考察)について「レジュメ」を作成させる。これをこの授業の中で発表させ、更にこれまでに何が解明され、今後、何を明らかにしなければならないのかを発表者も含め受講者全員に議論させる。このように学生が独自の修士論文を作成するべく知識を深め、能力を高めるためにゼミ方式の授業を採用し、より実践的な演習を行う。	

## 授 業 科 目 の 概 要

(保健医療学研究科保健医療学専攻)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備 考
専 門 教 育 科 目	病態情報学特論講義	<p>(12 中峯寛和)</p> <p>本特論講義は以下の三段階で実施する。第一に、リンパ球による抗原認識の多様性がいかにして構築されるかについて、系統発生的および固体発生的に解説する。後者では正常および異常状態にあるリンパ球の解析を通じて、免疫学の分子生物学的側面の理解および方法論の習得に重点を置く。第二に、生体諸臓器を一次、二次、および三次免疫臓器として捉え、それらの特性を解説し観察方法を習得させることで、免疫学の解剖・生理学的および病理学的側面を理解させる。第三に、病態情報の伝達に係わる測定系(抗体活性、サイトカインレベル、リンパ球の免疫表現型など)を解説し、免疫学の検査学的側面を理解させる。</p>	
	病態情報学特論演習	<p>(12 中峯寛和)</p> <p>本特論演習では、主に「病態情報学特論講義」で習得した知識に関する、文献検索および解読方法について説明する。文献検索にはウェブサイトも有効に活用すべく指導し、どこまでが一般的に受け入れられている事象で、どこからが今後の問題点であるのかを、明確に整理するよう指導する。広く情報を得るため原著英文論文を教材とし、授業は可能な限り英語で行う。個々の文献で扱われている研究成果については、方法・結果の解釈の妥当性および考案における論理の展開はもとより、当該研究を実施するに至った着想に重点をおいて、討論を行いつつ授業を進める。このようにして、「特別研究」テーマの選択肢を広げ、研究計画を学生自らが立案できるよう指導する。</p>	
	内科系病態学特論講義	<p>(概要)</p> <p>内科系病態学概論で述べた代表的な疾患について、その症候、病態、治療や予後についてそれぞれの専門的な立場から最新の知識も含め講義する。また、東西医学の特徴を</p>	オムニバス方式

授 業 科 目 の 概 要			
(保健医療学研究科保健医療学専攻)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備 考
専 門 教 育 科 目		<p>生かした医学・医療のあり方についても言及し、医療従事者としての自覚をもって患者に対処できるよう講義を構成する。</p> <p>(オムニバス方式 / 全 15 回)</p> <p>(15 津田和志 / 4 回)</p> <p>西洋医学においては日々新しい知見が集積され、臨床応用されている。内科学分野においても分子生物学的手法により各種疾患の病因遺伝子の同定やメタボリックシンドロームにおける新しい内因性因子の発見などがみられる。本特論では、西洋医学における新知見を東洋医学の病態生理の解析や治療に応用し、両者の関連性を検討することにより、最新の医学知識を有し、東西医学を融合させた医療を可能とする人材の育成を目的として指導する。</p> <p>(16 畑村育次 / 4 回)</p> <p>近年日本社会において、糖尿病、脂質異常症、高血圧、癌等に代表される生活習慣病は急増しており、その多くは合併症として心血管系の障害を伴い、それがまた疾患の原因ともなっている。この内科系病態学特論ではこういった生活習慣病のそれぞれの疾患についての各論の講義を、血管病態から見た臨床的および基礎的な論文的考察をも鑑みておこない、最近の医学的知見を身につけた保健医療人として活躍できるよう、疾患に対しての理解を深めることを目的とする。</p> <p>(1 吉田宗平 / 4 回)</p> <p>高齢社会を向かえ、希少疾患とされて来たアルツハイマー病やパーキンソン病など老年期神経疾患や脳血管障害が日常診療の中で益々増加している。保健医療人として、神経疾患をもつ患者に対して療養指導や健康管理する上で、三段階診断(3-steps diagnosis)に基づく科学的なアプローチより患者の病変部位と病態をよく理解し、治療手技の適否を誤らないこと、また、チーム医療の一員とし</p>	

授 業 科 目 の 概 要

(保健医療学研究科保健医療学専攻)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備 考
専 門 教 育  科 目		<p>て、一般的な医学知識に基づいて協調できることが重要である。本講では、神経学的診断学の基礎的原理を講義し、神経疾患に科学的なアプローチが出来るよう論理的な思考が身に付くようを指導する。</p> <p>(17 紀平為子 / 3回)</p> <p>神経疾患をさらにより深く理解するため、老年期神経疾患として、特にアルツハイマー病、パーキンソン病、筋萎縮性側索硬化症、脳血管障害性認知症やパーキンソニズムを取り挙げ、その臨床症状と神経病理、病態生理および最近の分子生物学的知見につき概説を行う。特に神経変性疾患では、遺伝子異常或いは遺伝子多型と環境要因の関連が重要視されており、疾患発症に関連する様々な遺伝的要因や危険因子を学習する。また脳血管障害では、発症様式や症状、鑑別診断、関連した様々な病態やリスクファクターにつき学び疾患予防に向けて指導ができる能力を修得する。</p>	
	内科系病態学特論演習	<p>(概要)</p> <p>本演習においては、特論・講義で行った講義内容を更に深化させるため、その分野での新しい知識についての文献検索方法や論文の読み方、今後の研究のための研究計画の立て方を具体的に教授する。</p> <p>(オムニバス方式 / 全 15 回)</p> <p>(15 津田和志 / 4回)</p> <p>本演習においては、メタボリックシンドロームに関連したアディポネクチンなどの内因性因子の病態生理学的意義を明らかにするとともに、高血圧を主体としたメタボリックシンドローム患者を対象に細胞膜 fluidity を電子スピン共鳴法にて測定し、血管内分泌因子や酸化ストレスの膜機能に及ぼす影響を nitric oxide (NO)や Ca 代謝機構と</p>	オムニバス方式

授 業 科 目 の 概 要			
(保健医療学研究科保健医療学専攻)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備 考
専 門 教 育 科 目		<p>の関連から検討する。また、将来の動脈硬化病変や微小循環障害発症に細胞膜機能異常やこれら内因性因子がどのように関与するか検討を加え、本疾患の健康管理の上でのひとつの指標とする。さらに運動療法や減塩指導などの非薬物療法や薬物療法を実施した際のインスリン抵抗性や各種血管内分泌因子の変化が、細胞膜機能の改善や酸化ストレスの減少に結びつくか考察を加えてゆきたい。</p> <p>(16 畑村育次 / 4回)</p> <p>西洋医学においては新しい知見が報告され、臨床応用されている。特に最近では iPS 細胞 (Induced pluripotent stem cells) が樹立され、再生医療の応用に向けた基礎研究および臨床応用研究が、日進月歩進んでいる。本特論では、これら最新の医学論文を中心に臨床研究および基礎研究に触れ、次いで、演習においては、研究の論理展開および研究手法 (特に分子生物学的手法) を学び、研究テーマなどを自ら考え、研究実験計画を立て、実験を遂行する専門的な知識や能力を身につけるように指導する。</p> <p>(1 吉田宗平 / 4回)</p> <p>神経疾患に対する三段階診断 (3-steps diagnosis) により、実際の症例報告から患者の訴える症状の病変が、どこにあり、どのような性質のものか推論・把握し、治療手技の適否を、文献検索など evidence-based な根拠に基づいて判断できるよう指導する。また、鍼灸や理学療法などにおける物理学的刺激に対する生体の反応を、指尖脈波、体表温度、脳波、筋電図など生理学的パラメーターやアクティノグラフィーによる日常の活動量として継時的に記録し、その時系列データの収集・解析方法を学び、病態を客観的に評価できる基礎能力を養成する。代替・補完医療や伝統医学における診断・治療手技を科学化し、日常の治療方針等に将来活かせるよう指導する。</p> <p>(17 紀平為子 / 3回)</p> <p>臨床の現場で、医療者として常に最新の知見を涉猟し自</p>	

授 業 科 目 の 概 要

(保健医療学研究科保健医療学専攻)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備 考
		<p>ら問題点につき気づき研究・検討ができる基礎能力を身につけることを目的とする。具体的には、老年期神経疾患として、特にアルツハイマー病、パーキンソン病、筋萎縮性側索硬化症、脳血管障害性認知症やパーキンソニズムにつき、医療上の医学的基礎知識や療養生活上の諸問題、患者のQOL向上のための社会的な仕組みなどについて学ぶ。演習の方法としては、主として自主的な文献検索と発表による討論形式で講義を進めるものとする。</p>	
専 門 教 育 科 目	高次神経病態学特論講義	<p>(概要)</p> <p>われわれの高次脳神経機能である心の働きは、人間特有のものであり、人が生活を営む上で欠かせない機能である。これに支障が生じると、精神機能と自律神経機能に関する様々な病態が生じてくる。精神医学的病態や自律神経に及ぼす影響など概観し、具体的な心身医学的療法を例示し、生理的な効果を学習することを目標とする。</p> <p>(オムニバス方式 / 全 15 回)</p> <p>(13 郭 哲次 / 8 回)</p> <p>現代のストレス社会において、精神・神経・内分泌系、免疫系などのストレスに対するダイナミックな応答として、さまざまな心身・精神医学的病態が顕現化しており、心理・社会的背景の中での人のこころと行動の科学的理解や解明が期待される。いくつかの心理・社会的基盤に基づく身体・精神医学的病態を、具体的に例示し、保健医療に携わる医療人が、個々の病態ごとに bio-psycho-social な視点から包括的な理解を深めることを目標として、心身・精神医学の基盤となる枠組みを講義する。</p> <p>(20 近藤哲哉 / 7 回)</p> <p>自律訓練は、催眠の欠点(治療者任せ)を補うために、1932年、ドイツの精神科医 Schultz, J.によって創始され</p>	オムニバス方式

授 業 科 目 の 概 要			
(保健医療学研究科保健医療学専攻)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備 考
専 門 教 育 科 目		<p>た。患者自らが公式を繰り返すことによる暗示効果を利用して、筋肉だけでなく自律神経が支配する内臓も意志でコントロールし催眠でリラックスしたときの身体の変化(四肢の重い感じや四肢のあたたかい感じ)から初めて数種類の体感を起こす練習法であり、体につられて心もリラックスでき、疲労回復や自律神経調整やエネルギー再充電や心身のひずみによるほとんどすべての疾患の治癒が期待できる。この練習法は、医療従事者で学会の講習などを受ければ誰でも患者に実践できる。本講義ではこの適応、禁忌や方法の初歩について講義する。</p> <p>光フィードバックは、リラックスした状態で多く発声するアルファ波が光刺激に同調しやすいことを利用して、患者自身の脳波からアルファ波だけを光信号に変換してリアルタイムに患者のアルファ波のゆらぎのリズムで目を刺激し、短時間で効果的にアルファ波を増加させる装置である。これについても講義する。</p>	
	高次神経病態学特論演習	<p>(概要)</p> <p>特論講義での学習を踏まえて、さらに、電気生理学的な検査手法や様々な検査が、実際に精神・身体疾患の検査や治療に応用実践が行われているかを実際に確認・検討しながら、実践的にその検査手段や治療技法の特性を体験学習する。</p> <p>(オムニバス方式 / 全 15 回)</p> <p>(13 郭 哲次 / 8 回)</p> <p>心理・社会的基盤に基づく精神・身体疾患の様々な症状に関して、心・身両面から把握・理解するために、過去の関連論文を踏まえながら、心理テスト及びポリグラフ(脳波、脈波、筋電図、眼球運動)を用い、中枢神経系としての脳機能、自律神経機能や末梢の表象としての身体の変化を客観的に計測し検討する。さらに、これが、疾病の診断や病</p>	

## 授 業 科 目 の 概 要

(保健医療学研究科保健医療学専攻)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備 考
専 門 教 育 科 目		<p>態の把握、治療効果の判定のみならず、心身相関の気づきをうながし、セルフコントロールなどの治療にも利用できることを理解・学習する。</p> <p>(20 近藤哲哉 / 7回)</p> <p>特論講義において述べた自律訓練または光フィードバックを体験し、指尖脈波から計算した心拍変動または唾液アミラーゼによって生体への効果を検証する。</p>	
	臨床鍼灸学実習	<p>(3 若山育郎・5 榎田高士・6 吉備 登 8 山本博司・21 坂口俊二・22 谷 万喜子 23 木村研一)</p> <p>この科目では、卓越した鍼灸の臨床能力をつけるため、本学附属診療所の医師である若山育郎の下で鍼灸治療の適応症であると判断された外来患者を対象に、附属鍼灸治療所において、鍼灸師である指導教員の下で以下の治療実習を行う。</p> <p>(1) 東洋医学的な診察・診断法(鍼灸治療の適否の判断を含む)</p> <p>(2) 鍼灸治療方法(処方を含む)の決定</p> <p>(3) 鍼および灸による治療技術の実際(医療過誤防止を含む)</p> <p>(4) 治療効果の東洋医学的な評価法</p> <p>なお、実習は6クラス編成とし、鍼灸師である教員1名がそれぞれのクラスを担当する。</p>	
	臨床身体機能学実習	<p>(9 鈴木俊明・24 高崎恭輔・25 谷埜予士次 26 米田浩久)</p> <p>この科目では、身体運動をより深く理解するために、本学附属診療所 リハビリテーション科において理学療法</p>	

授 業 科 目 の 概 要			
(保健医療学研究科保健医療学専攻)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備 考
専 門 教 育 科 目		<p>士である鈴木俊明の統括、指導の下で、理学療法士である指導教員により、理学療法実習を実施する。運動療法をおこなう疾患は、運動器障害、神経障害、内部障害など多岐にわたる。本実習では、特に運動器障害、神経障害を呈する疾患の理学療法を中心に実習する。具体的には、臨床身体機能学特論講義・演習で理解した健常者の身体機能と患者の身体機能の違いを、治療者による動作観察・分析によって明らかにできることを目標とする。患者様の動作特徴を明確にすることで患者様の問題点を把握することができるため、次の段階として、その問題点に対応した理学療法を学ぶ。理学療法に関しては、様々なアプローチを実習するが、なかでも、臨床身体機能学特論演習で習得した経穴刺激理学療法を応用することによって、患者様への治療効果を確認する。</p>	
特 別 研 究 科 目	特別研究	<p>( 1 吉田宗平 )</p> <p>神経・筋疾患に対する東西の伝統的治療手技やりハビリテーションに関する科学的評価と治療法を開発する。肩こりや腰痛など慢性疼痛性疾患の背景には筋トーンの異常(筋短縮)が存在し、これに対して頭頸部や四肢への物理学的刺激が、中枢神経系を介して筋トーン制御系に与える影響を筋電図学的手法により解析し、科学的な治療法の評価法を確立する。また、指尖脈波など時系列データを利用して、物理学的刺激による自律神経系の微細調節(fine-tuning)応答を解析し、伝統的治療手技の客観的指標を抽出し、診断・治療システムの科学化を図る。</p>	
		<p>( 2 錦織綾彦 )</p> <p>鍼灸は全人的な医療であり、自然治癒力を高め、同時に患者のQOLを高めることに大きく貢献している。本研究では、医師である大学院教員(若山育郎)により、鍼灸治療が適切であると判断された患者の頭痛、肩凝り、眩暈、</p>	

## 授 業 科 目 の 概 要

(保健医療学研究科保健医療学専攻)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備 考
特 別 研 究 科 目		耳鳴り、不眠、種々の痛みなどを伴う自律神経障害および不定愁訴症候群などを対象として、鍼灸治療を実施し、患者のQOL向上にどのように貢献するかを明らかにする。	
		<p>(3 若山育郎)</p> <p>日本文化の特徴は、中国文化を吸収して独自の大和文化を築き挙げたことである。鍼灸や漢方など日本の伝統医学ももちろんその中に含まれる。鍼灸について言えば、現在の鍼灸研究の範疇には、伝統医学における鍼灸のこうした来し方行く末を研究する分野はまだ確立されていないが、社会鍼灸学という学問を育てて行こうとする動きはある。</p> <p>この社会鍼灸学という新たな分野は今後の日本鍼灸の発展を考えると非常に重要で、本特別研究ではそのさきづけになりたいと考えている。具体的には、</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 我が国における鍼灸の発展とその変遷</li> <li>2) 東洋医学といえは中医学が代表のように捉えられているなかで、日本鍼灸を含む各国の伝統医学の意義やあり方</li> <li>3) 現代(西洋医学)と鍼灸との協調の仕方、住み分け(日本における鍼灸のあるべき姿)</li> <li>4) 今後の鍼灸教育のあり方(大学教育としての鍼灸)</li> <li>5) 日本鍼灸を世界に広める必要があるのか、あるとすればいかなる方法が良いか</li> <li>6) 各国からの日本鍼灸を含む留学生の実態などについて学生と議論をしながら、方法論を検討して実践できるように指導する。</li> </ol>	
		<p>(4 戸田静男)</p> <p>炎症に伴って発生する酸化ストレスに対して、鍼灸刺激が抑制作用を示すことが報告されてきている。このようなことから、種々の炎症実験動物モデルを対象に、生化学および薬理的な手法を用いて鍼灸の抗酸化ストレス作</p>	

授 業 科 目 の 概 要			
(保健医療学研究科保健医療学専攻)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備 考
特 別 研 究 科 目		用に関する課題の研究指導を行う。また、多くの研究者により明らかになってきた漢方薬やその素材である生薬、そして生薬成分の抗酸化ストレス作用についても着目しながら、灸治療に用いられる艾の素材であるヨモギの有効性に関する研究指導を行う。	
		( 5 榎田高士 ) 医療における患者への安全確保の重要性はますます重要となってきた。本研究では鍼灸治療における過誤(感染、折鍼、気胸、熱傷、神経障害、症状の増悪など)を多方面から詳細に分析し、安全な鍼灸臨床のためのリスクマネジメントについて検討する。特に感染防止対策については、細菌学的手法を用い、また安全な刺鍼についてはヘリカル CT を用いて研究を行い、論文作成がおこなえるように指導する。	
		( 7 増田研一 ) 運動器の様々な病的状態について行われる種々の保存治療に関する効果のエビデンスを明確化する試みが近年多くなされるようになってきている。このことは鍼灸など東洋医学の作用メカニズムの解明にもつながる可能性がある。スポーツ医学やリハビリテーションなども含めて、特にその機能的効果を総合的な観点から様々なアプローチを行うことを目的とする。	
		( 8 山本博司 ) 変形性膝関節症に対するはり治療の臨床的效果について研究するが、対象は関西医療大学附属診療所にて、変形性膝関節症と診断された者とする。そのうち同意書を得た参加者に対し、同附属鍼灸治療所にて、1か月間・週2回、目的とするはり治療と対照となる治療との2種類の治療	

## 授 業 科 目 の 概 要

(保健医療学研究科保健医療学専攻)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備 考
特 別 研 究 科 目		<p>をクロスオーバーで行なう。解析はそれぞれの治療前後の結果指標の差を比較する。</p> <p>結果指標として</p> <p style="padding-left: 20px;">自記式膝 OA 調査票(WOMAC)</p> <p style="padding-left: 20px;">医師所見</p> <p style="padding-left: 20px;">日本整形外科学会膝疾患治療成績判定基準</p> <p>などを用いる。</p>	
		<p>( 9 鈴木俊明 )</p> <p>身体機能の特徴について、西洋医学的な研究手法を用いて研究する。また、身体機能に障害を有する患者様への治療法としての理学療法効果の客観化および、新しい理学療法手法の確立を目指すための研究をおこなう。</p> <p>理学療法と鍼灸医学の考えを組み合わせた新しい治療法である、経穴刺激理学療法の応用と、その効果に関する神経生理学的研究を筋電図、誘発筋電図を用いておこなう。</p> <p>また、近年、理学療法領域において注目されている運動イメージに関する神経生理学的研究を展開する。</p>	
		<p>( 10 東家一雄 )</p> <p>近年の医療は、病気の治療から日常生活の健康維持を目的とする予防医療の枠組みへと変化しつつある。そこでは生体の恒常性維持を担う仕組みとして、ウイルスや細菌による感染症から生体を防御する免疫系の理解に対する重要性が高まっている。本研究では、末梢リンパ器官の一つであるリンパ節の機能に焦点を合わせ、小型実験動物を対象として、抗原刺激時の免疫応答に伴う組織構築や機能分子の発現について、電子顕微鏡やフローサイトメーターなどの設備や分子生物学的手法を用いた解析を行う。</p>	

授 業 科 目 の 概 要			
(保健医療学研究科保健医療学専攻)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備 考
特 別 研 究 科 目		<p>(11 檉葉 均)</p> <p>我々生体を傷害する、あるいは傷害させる可能性のある侵害刺激は、高閾値機械受容器もしくはポリモーダル侵害受容器で電気信号に変換され、この情報は脊髄後角や三叉神経脊髄路核において一次感覚ニューロンから二次感覚ニューロンに伝達され、更に高次の中枢へと伝わることになる。この脊髄後角や三叉神経脊髄路核における電気信号の伝達は、介在ニューロンや脳幹からの下行性ニューロンにより修飾される。脊髄表層のニューロンは侵害情報の伝達に深く関わっており、介在ニューロンや下行性ニューロンにより抑制を受けていることは知られているが、深層ニューロンについては不明な部分が多い。そこで特別研究では、脊髄後角の深層ニューロンの形態学的および電気生理学特性について研究を進める。</p>	
		<p>(12 中峯寛和)</p> <p>一般に難治性とされる疾患群のうちには、自己免疫疾患を代表とした、免疫異常に基づく疾患が少なくない。それらに対する鍼灸あるいは理学的刺激の影響を、実験動物を用いて情報伝達異常の観点から免疫学的、病理学的に検討する。具体的には、そのような疾患をもつ(あるいはある時期になると発症する)マウスを用い、疾患の発症と経過に及ぼす上記刺激の影響を検討する。時期を考慮して刺激を与えた後、それらのマウスを病理解剖に付し、肉眼的、組織病理学的、および免疫組織化学的な検索を行う。さらに脾、および腫大していればリンパ節からもリンパ球を分離し、その免疫表現型およびサイトカイン遺伝子発現について検討する。得られたアナログおよびデジタルデータについて陰性対照群との比較検討を行い、抽出された問題点に基づいた追加実験を適宜行う。これらのデータを解析し、最終的に修士論文に向けた原稿を作成できるよう指導する。どのような疾患を対象とするかについては、可能な範囲で学生の希望を聞き入れる。</p>	

## 授 業 科 目 の 概 要

(保健医療学研究科保健医療学専攻)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備 考
特 別 研 究 科 目		<p>(13 郭 哲次)</p> <p>高次脳の働きである心とその病態の客観的把握は容易ではない。また、人の心と身体のふるまいは、心理・社会・生物学的存在として、それぞれ3者の相互作用の中で多様な結果となって表現されてくる。この3者における様々な切り口に焦点を当て、心理テスト(精神機能の評価尺度など)に加え、脳波、脳画像、筋電図、眼球運動、脈波などの生体測定ツールを用いて、主に人の中枢神経の働きとこれに関連した末梢性変化を測定・検討する。心身・精神医学的病態の客観化などに関し、研究の実践、指導を行ない、これらの課題に対し論文指導を行なう。</p>	
		<p>(14 中塚映政)</p> <p>我国は深刻な高齢化社会を迎えており、痛みの有訴者数は爆発的に増加している。したがって、医療者は痛みに対する知識と理解を深め、痛みを訴える患者に対して真摯な態度で向き合うことが求められている。これまで、痛みの生理現象をとらえる方法として、電気生理学的な手法が中心的に用いられてきた。この特別研究では、パッチクランプ法を用いて痛みを受容する脊髄後角ニューロンの神経活動を観察する。具体的には、麻酔下に実験動物から脊髄を摘出して、脊髄横断スライス標本を作製する。標本を人工脳脊髄液で灌流し、単一の脊髄後角ニューロンにパッチクランプ法を適用して、その神経活動をリアルタイムに観察する。このように、神経生理学における先端的技术を学習し、実践することによって神経科学への探究心と理解を深める。</p>	
		<p>(18 金井成行)</p> <p>整形外科疾患では機能回復にリハビリのみでは不十分で、手術療法にいたる場合がある。</p> <p>その場合でも術後の筋力トレーニングが重要である事</p>	

授 業 科 目 の 概 要			
(保健医療学研究科保健医療学専攻)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備 考
特 別 研 究 科 目		<p>はいうまでもない。実際に診察に用いられている、筋力計、筋硬度計、筋痛計などを用いて整形外科的にリハビリの効果の解析を行う。</p> <p>さらに、肩こり、腰痛、むくみ(下肢の浮腫)の身体機能の異常に対して効果を与える手法に磁気治療がある。この治療法の客観的効果を西洋医学の見地から研究する。</p>	
		<p>(19 大西基代)</p> <p>灸の作用機序を議論する上で艾成分の生理活性を無視することはできない。既知の成分分取だけでなく新規物質の分析並びに分取方法の確立は、艾成分の生理活性を検討する上で必要である。そこで、本研究では艾の新規物質の分析分取、既知物質の分取を高速液体クロマトグラフを用いて行う。さらに、分析分取された物質の生理活性の検討も行い、灸の作用と艾成分の生理活性との関係を探究する。</p>	
		<p>(21 坂口俊二)</p> <p>鍼灸治療の社会的認知を高めるには、有効性、安全性、経済性の検証が不可欠である。本課題では、鍼灸臨床で取り扱うことの多い不定愁訴、特に冷え症を中心とする自律神経機能の異常に対する鍼灸治療の効果に関して、臨床研究(pragmatic trial)の実践を目指す。研究では実験計画からデータ収集、解析、結果の解釈などを学習させ、論文作成が行えるよう指導する。</p>	
		<p>(22 谷 万喜子)</p> <p>本学で、平成7年より継続的に臨床効果検討をおこなっており、神経疾患のなかでも鍼治療効果の期待されるジストニアに対する評価と鍼治療技術を習得する。臨床研究として、臨床上で得られた効果・課題から研究テーマを定め</p>	

## 授 業 科 目 の 概 要

(保健医療学研究科保健医療学専攻)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備 考
特 別 研 究 科 目		<p>る。また、ジストニアに対する鍼治療では、罹患筋の筋緊張異常をコントロールするために循経取穴の理論に基づいて、遠隔部経穴への刺激を用いている。そのため、基礎的研究としては、循経取穴による鍼刺激効果を神経生理学的に検討する。それぞれの研究の結果、得られた成果について学会発表および論文作成を行う。</p>	
		<p>(23 木村研一)</p> <p>鍼灸は皮膚、筋肉などに機械的刺激や温熱刺激を加えることで痛みを抑え、循環を改善することで症状を緩和する治療法である。この機序として鎮痛については下降性疼痛抑制系やゲートコントロール理論などの疼痛抑制系の賦活また、循環改善については軸索反射や血管収縮性の交感神経活動の減退、あるいは血圧変化に応じた受動的な血流増加などが考えられている。本特別研究では鍼灸刺激の局所の皮膚血管拡張反応について着目し、ヒトを対象にレーザー血流画像化装置、レーザードップラー血流計を用いて評価し、その機序について検討を行う。</p>	
		<p>(24 高崎恭輔)</p> <p>我々が推奨するトップダウン過程での理学療法評価では動作の分析が重要となる。その中で、より複雑な動作を分析する場合や、より客観的に動作をとらえる場合には三次元動作解析装置が用いられる。現在我々は立位におけるバランス機能の質的な評価指標の確立に取り組んでおり、その試みの中で三次元動作解析の有用性について検討していく。</p>	
		<p>(25 谷埜予士次)</p> <p>運動器疾患に対する有効な理学療法を確立するための基礎的研究を行う。具体的には筋電図(動作および誘発筋</p>	

授 業 科 目 の 概 要

(保健医療学研究科保健医療学専攻)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備 考
特 別 研 究 科 目		電図)を用いた電気生理学的検討や、三次元動解析および圧力盤を用いた運動学的検討を行う。	
		(26 米田浩久) 障害者の動作再獲得のためには欠かすことできない重要な因子である人の運動学習過程について、電気生理学的ならびに重心動揺や動作解析などの運動学的諸指標また、運動の発現が、「情意・情動」に端を発することに着目し、情動と運動・運動学習との関連性を解明する。	